

プロローグ In The Beginning

ほくはプロレスから卒業できなかった。少年ファンである。少年ファンだなんていうには、もちろん、もうトシをとり過ぎてている。3歳か4歳のときに母親の茨城の実家で祖父といっしょに、金曜夜8時のプロレス中継を観たのがプロレスとの出逢いだった。

昭和40年ごろの日本にはまだ、テレビのある家と、テレビのない家とがあって、貧富の差であるとか労働者階級と中産階級の生活レベルの違いであるとか、そういうことをあまり意識することなく、テレビのない家の人びとは、テレビのある家に行つて観たいテレビ番組を観せてもらうというコミュニティ・ベースの文化、習慣があつた。

ほくの祖父の家でも、プロレスの時間になると近所のおじさんたちが2、3人、いつもそうしているような感じで家にあがってきて、お茶の間で祖父といっしょにテレビの前に正座してモノクロの画面をじつとにらんでいた。ほくはオトナたちのマネをして祖父のすぐとなり正座し、それがいったいなんであるかわからないままそこに映っているものをながめていた。初めて観た試合はたしか日本組対外国人組の6人タッグマッチで、若き日のジャイアント馬場さ

んが、主人公」だったことはなんとなくおぼえている。

気がついたら、といつてもたつたいま気がついたわけではないけれど、ぼくはそれからいちども飽きることもあきらめることもなく60年近くもプロレスを観つづけている。

ぼくたちの世代が小中学生だったころは、いまでいうところの地上波キー局のテレビで週に何回か、それもゴールデンタイムにプロレス中継が放映されていた。いちばん人気があったのはやっぱり「金曜夜8時」のプロレスで、これもまた昭和のキッズにしかわからないたとえばなしになってしまふけれど、プロレス中継があった次の日は——ぼくたちが子どものころは土曜も学校があった——男の子たちは休み時間や放課後、教室の後ろのほうで机をどけてプロレスごっこをして遊んだ。ブレーンバスターやダブルアーム・スープレックスのような大技にトライしたいときは校庭の砂場を「特設リング」にしたり、体育館の隅っこに置いてあった体操用の分厚いウレタンマットを勝手に使ったりしていた。

プロレスはゴールデンタイムのテレビ番組だったから、プロレスファンもそれほどプロレスファンでもない人たちも、もっと大げさにいつてしまえばひじょうに広い層の大衆がいまよりもはるかに日常的にプロレスと接していた。でも、昭和のキッズにとってプロレスはあくまでもたくさんあるおもしろいものなのひとつで、プロレスよりも『ウルトラマン』や『仮面ライダー』に代表される特撮ヒーローものや、『巨人の星』や『あしたのジョー』のような、

フィクションではあるけれど、等身大の主人公の生きざまを描いたスポーツ根性もののほうに心を傾ける男の子たちもたくさんいた。

その瞬間がいつどうやって訪れたかは一人ひとりそれぞれちがうだろうけれど、だいたいの男の子は、かなり夢中になった時期があったとしても、やがてプロレスを卒業していった。嫌いになって離れていったわけではないだろうから、やっぱり「卒業」ということになるのだろう。ぼくはほかのなによりもプロレスが好きだったから、プロレスを観ること、プロレスの雑誌（やプロレスの記事が載っているスポーツ新聞）をかたっぱしから読むこと、プロレスについてあれこれ想像したり妄想したりすることをやめたことはなかった。

プロレスファンの男の子はみんな、おそらく普遍的に、ある経験を共有している。それは——少年ファンの代表単数としての——「ぼく」がプロレスが好きだということを口にする、オトナたちは必ずといっていいほど「ショーだ」「八百長だ」「くだらない」と判で押したような反応をみせる、というひとつのルーティンである。だいたいの場合において、そのオトナたちはプロレスファンではないのだが、それでも「ぼく」が大好きなプロレスについて「ぼく」が知らないなにかを知っている（つもり）らしかった。

もちろん、「ぼく」は「ちがう！」と反論してはみるけれど、少年ファンの「ぼく」にはオトナをやっつけるだけの論理もボキャブラリーもなく、そもそも、プロレスに対して、また

プロレスが大好きな自分にも、そこまでゆるぎない自信はまだなかった。

オトナたちとのそういうやりとりのくり返しから、ぼく自身は「偏見」「先入観」「固定観念」あるいは「差別」といった感覚を実体験として学習し、小学4年生くらいからプロレスそのものとプロレスが好きな自分の「弁護」を始めたように記憶している。

ジャイアント馬場とアントニオ猪木は、プロレスのヒーローであり、テレビのヒーローであり、最強のタッグチームから袂を分かち、それぞれが一国一城の主となって長い長い「天下盗り」の闘いを演じた宿命のライバルである。ちよつと大風呂敷を広げてしまえば、プロレスの宇宙ではいつもふたつの太陽が輝いていて、馬場さんには馬場さんのプロレス、猪木さんには猪木さんのプロレスがあった。馬場さんのことが好きな人は馬場さんがいちばん好きで、猪木さんのことが好きな人は猪木さんがいちばん好きだった。「ぼく」——たとえばぼくのようなプロレスそのものが大好きな少年ファン——は、馬場さんのプロレスと猪木さんのプロレスを同時に観ながら、馬場さんの生き方、猪木さんの生き方をリアルタイムで体感してきた。

本書は、馬場さんと猪木さんの物語とその歴史をひも解きつつ、ふたりが歩んだ昭和から平成、「ぼく」とぼくと同世代の少年ファンたちが歩んだ昭和から平成をもういちどゆっくりたどっていく。昭和から平成のプロレスについて論じることは、ぼくたちが生きてきた時代について綴ること。「ぼく」は馬場さんと猪木さんから人生を学んだのである。